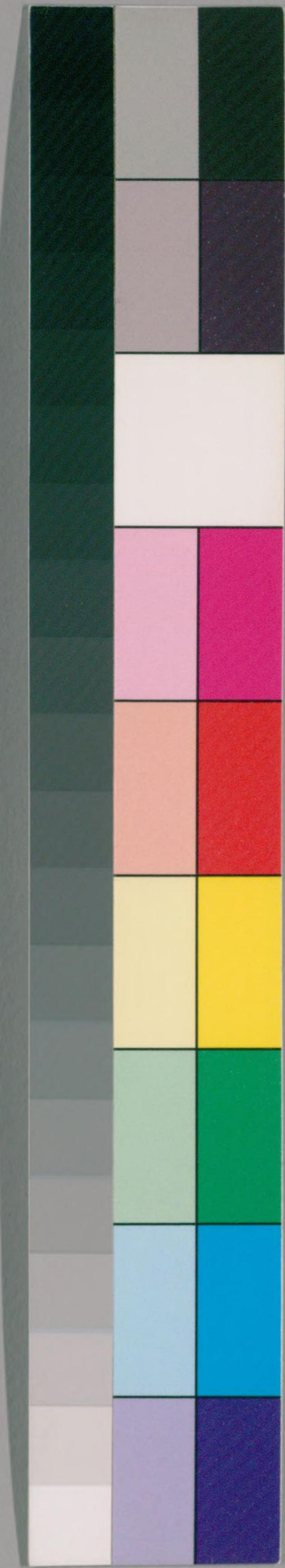




863
99

秋風紀行



国立国会図書館 タイトル『秋風紀行』 請求記号 863-99

ガラス使用



863-79

秋風紀行

讀^テ甲子吟行^ラ坐^リ有^リ思^ヒ立^テ矣^ハ行程十

里^ニ終^ニ雖^ニ一日^ノ之^レ旅^ヲ運^テ前途^ニ千里^ノ之^レ懷^ヲ

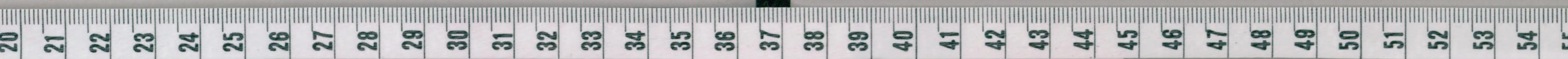
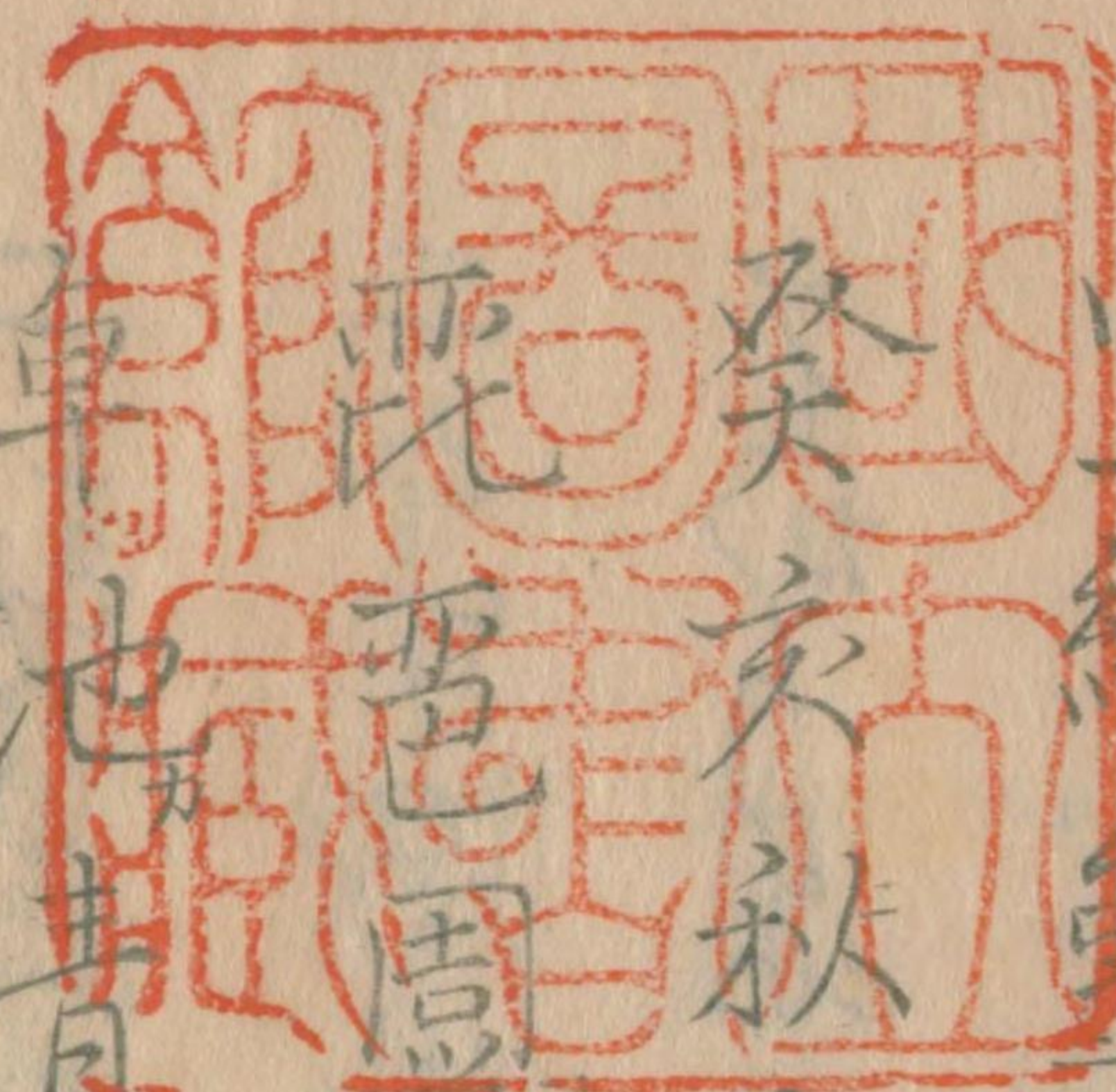
癸^亥秋九月二十一日三更月^下出

既^テ舊^ク周^ラ駕^ニ秋風^ニ飄^ラ然^ト到^リ于^テ三河國

車^馬池^舟昔^々處^ニ途中^ノ口^号

早行

まのふ似ぬ秋やと宵の猿の宅 松兄



過星崎

霧雨のさふ日のさす芒く車 士朗

二木山ハ山一乃往くハ路あり大廻

二年乃傳もせうふちの左一里

をかりふあり

矢矧おをりて

芳ゆや秋を尾花の橋の裏 士朗

卓池の家の子其谷とつもの橋の上

まきむくひよするはまひハ試呂う小所乃

菴小集りてまんい乃連あ守

芳ゆや秋を尾花の橋の裏 士朗

月きえ秋家一層うのあ 卓池

ちうくハ吟乃ふりを捨せ守 秋居

よまひ捨串るハ松葉葉あり 松兄

まきりハ幸此ハ終止より 方明

るあかまハよほハ梅う書 如高

すしうくは作をたぬくハ道家
砂文

重雀のあうまやとくら
岱呂

酒酌す中ひりきさる嬉さ
不忒

初瀬の夕をささる琵琶乃音
波遊

芝草の毛涙を拂ふきさる
楚孫

二日遊中於山ゆー乃恋
士朗

雨戸ひく方まひつて雪月
卓池

一雨の砧の露おどけ
其谷

立阿う野鴨の尻つゝ砂乃上
松兄

待々小松を火子の白ー
秋居

紫の戸城あねハつゝ花の妻
如高

とあるしよハ巾の風おく
方明

あささるものすゝ乃荒海山
岱呂

佛よちねと撫さるたさる石
砂文

僧正のあうを河ハ捨さる
波遊

丁鉈毛見くぬ 争乃菽
不忒

おとすお毎くふ啼出並 其谷
こくも借る庵の簾並 楚孫
川越の脊の高きを羨すれ 秋居
板の波成めと家 卓池
御遷幸の夕も秋の風立 方明
秋習げけ初る三日月の影 松兄
出代の日おを櫛の歯よりく 研文
二つは夕さゆくは深貝 如高

此さとの名れ申のいよら坊解 不忒
のりやあまり 小くく起 斌呂
夢のちよりちのむら清き 楚孫
古草乃をれる葉畑のるち 波遊
笑あよ十日白髪をときあげて 其谷
猪のちり身 ちる 方明
二十三日青い處はちり伊勢の文とて
卓池もちる



昨日十三日横濱より来たついでに

連中の上京より上りて是一事なり

砂文佐屋まで送らるれや

石のよきもの舟を詠まや 砂文

お砂文舟

藤巻と見返るお花のあゝ 五雄

舟中

枯れおれハ階もやんを眺めれ 梅間

十日九日舟中から見たあぢのひ毛

とてやとてやみ寄るよきまらや

舟の屋敷さへもよ月を眺めぬ 孔阜

あゝおとこいふや

山さの屋根かゝるもやうか 巢北

松風やふも夏よあゝあらのを 李臺

舟月のあゝあゝ氣う新や 道彦

梅さやうもいふはせうか 葛三

此二句はさるりみちの帖をよめい
りきりよそあるうもせやの藤おの
やういそつよま

青川う留ももくきより中推已も
たちよわやゆあ他かみてをるや
そむと幸ふあふいにたかきれに目み
厚の月くはむあしめ向さる他神
よそつとさるるさるるさるる

椿堂の長葺のあつりしきすくはは
二見乃月やとねこのうへあつる
ううけうひさきとまお瓢を肩出
やうけ合のうらりふさや
日ハそとふらやけ合の後の月 椿堂
いしそきやうま二見の残よあつる
月ハ半てふらやと山嶽のうらり
さるる年産接ふらうあ



阿そねさふ盃おと月見う那 梅旬

掃とせなやしく舟去く月見哉 五雄

女あふふ者どころそ

松風の者い恙あす月取る事 椿堂

すくやうり出む庭のあつ夕 五雄

是こそ藤まきやしく廻れ事と語り

中のみ取あつれ中よふ宣

たふ九月十日

梅旬
五雄

朱栴人生

カルマ

二十四日 掃き残す不感きととめさまきまはしの

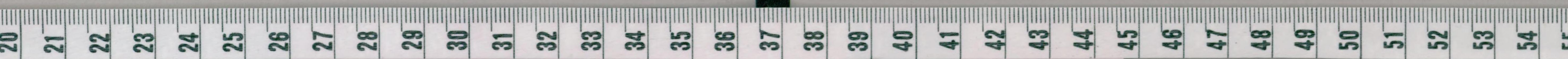
さくとちそひ出つ

大樹寺

日うおさうも山うけく〜字のあ 岱呂

大樹寺の所ふる石あり小お碓 如高

あのお〜りくちと籬の午時を告る



夢本を成言書ふらむ果あり

杉風のささく中も存り能 波遊

山まらハあうさううと柿の枝 幸女

足はく木子も秋のゆゑ 彦哉 士朗

就山古

岸上よ茶店ありは弱き中かみ秋来山

雨多落葉無人掃らるるきす

瀧川や水も骨打あきこの風 不忒

飛鳥のつれやまきしむ秋のつる 秋居

見つめてもをふねぬ秋のゆゑ 其谷

僧まの垣申のあやの字波う車 卓池

立野のきこくもゆうとるふり 全

鬼塚

夕暮ハ鬼も沸けり塚のま 松兄

山のぼりやきねあり大指の破るてんち

変とてひらき此山の名所をいふとてや山

稻のや刈や田の焚夕烟 士朗
牛ふ系を——の山 方明
るさの此道か——す 楚孫
二十五日大雨降青ニ度不題を採る

一瓢の酒はあぬも 秋のあめ 楚孫
露のちやふも 啼中 如高
層の夢 町常 八月おる 其谷
此里を——の取も 波遊

秋のうらむ 起るの田を刈 不忒
菊のわらわら 門のふらら 曾月夜 秋居
山道の 眞し——の 松兄
ゆく 秋や窓のら 方明
紫舟をとめて 秋を 砂文
木槿さく 秋ふ 岱呂

此のふおる 人の文の 大阜
人の皆を——の 槿

（一）

その影のさびしきものや月夜 硯静

七條小秋—家子のあまの歌 祖風

まゝい尾張の文と卓池持おてし

此夕帰國の—いよゝん朝三河—

ちきり—此節は指し度とかな

さうさう林原入山あのに—

風情も—牛—もさかすか帰路

孔阜ふ一宿一日留

胡良の種と名後の月見哉 孔阜

あけそて一打余おす中か—

山畑も—あま露ふちりよけ 孔阜

茶の木農枝を志こむる 梅畠

魂むくき売の端を憫して 五雄

ひ—や—の氷ふ月うち— 孔阜

鹿—鳴—く—い—そ—め—る—と 梅間

推己亭も—一宿——中—

宿うりふに人まふなり秋のたれ 推己

あるうらうらしいおのそも一おまらり

まふにまふ

らうらうらおと降け山雲迄 五雄

人の位やう響るう啼一尾 推己

草の穂のちひくも若うんま 梅回

松のちうねふ見申ふ有明 五雄

ちうくま牛のう角結とら境 推己

れとひ取ちるる白雲のち 梅留

安刺もい伴縁のほめと名をなて 五雄

年の端もて返るうしよま 推己

世の中のさぬに豆腐ふすぬのる 梅回

探題

うらうらうらうらいも虫の鳴きん 推己

おのうらうら一時あれよもる尾花 梅回

研文う文ふいよ目のうらうら

新あけ指の秋や 鳩のあや 砂文
と食のほてもあす秋のれ 全
樓中よりく 燈あきのれとよゆく
ぬりやる

はる

神垣やありのまもあふ秋の月 梅間
ありく記あまもあふ秋の月 子雄

豊盛

かたうあけ日うけふあや栗胡枕 五雄

朝熊山

ふく首をたすくしう記う那 梅間
絶頂ふくくも酒居ふ足をとこ心風
あふくは障子よ穴をあけて覗きく
心魂をとあやましくしん
申く秋や板戸をきくく松の枝 五雄
二目おは合のあふくを樓中よりく



いづれ

此日の月乃物ふあやうらゝ 梅向

写子ひくちるあも物や男の質 椿堂

あまの影を嫌よ吸も 五雄

山吹の花ちる駕ふおしこまれ 梅留

又

萱津のさしれこる番共かきあゝ 五雄

のうくや左様よ小生ひるまゝ 梅向

雪のしらぬまらゝの眉とこころれ 椿堂

らゝ宮村あて

さ萩ちんあふけあゝる 榎哉 梅向

松阪あて 滄波うゝ毎糸菴とこころし

いづれも起くはふるあひだのれ 滄波

席上丹生の丹丘とあふ春の風と見す

風顔面白くはまし早き梅とまゝのほろ

さゝお帰菴の待たしと人へ来ておぼる

ましてはあきしよ一杯一句三杯
 鹿蹄や寐ても起てもおぼろの露 桂五
 むしめく相い秋らり萩のむ 少汝
 月よりやいひてをさす九月哉 菊彦
 ありやける虫をおよきりし守 葛井
 風つらつらとさよとらす小秋哉 天老
 あつらふかきよせられ秋のる 岳輅
 十日初と月見をそ内の哀なる 大阜

是等の趣一しあもつて度と雄士の
 水滸菴より人待たるれ中よ卓地
 いふもてはよき希にむし

かりし世百 梅百

朱松先生

梅下

士朗曰伴執のよみいひしやうや卓地曰蝶ふ
 鳴るしよあふ青あふいあぬぬ工と人も

古り串を糸松の跡を半くひて 卓池

五六町能賣あまをうへとあ 士朗

あはさき 蝶の袖よりたぐく 松兄

念佛んやせぬものど月をうそく 卓池

掬もひさし毛引傾きける 方明

春風よ出人歌のうこくちり 松兄

まきくちりさへに花 磨 よせ 士朗

まきくちりさへに花 磨 よせ 士朗

串をひたすの形男の長持 卓池

山まへに立ちし神の業やうん 士朗

眼鏡ひとをうけり世の中 松兄

夢の簀宮穿鬘るよ年をねて 卓池

宗祖みあを文也よやる 方明

けさまへへあはさきう 初み葉 松兄

あろをうそく 恭す地裁 士朗

さぬくよまの白をうけ 妻は 方明

おの鳥巣もくろむをまは	卓池
福原の都も湫の柄よふとす	士朗
味噌をちよひりふし暮木葉ぬ	松兄
股引よ旅の海ハ本ナアヨキヤ	卓池
肩アアこれハ猿のぬをきう	方明

跋

三日あふはるきとをさあはとんひ
 十日廿日のその花中山あをを
 十日人そり狩とらふらるるを
 牛を扱とるすしの事むいなるあは
 ちのひあありとまて風もま
 坊人曰一日もいふ多き山よ
 十人曰一日もいふ多き山よ





秋風紀行

山崎松平

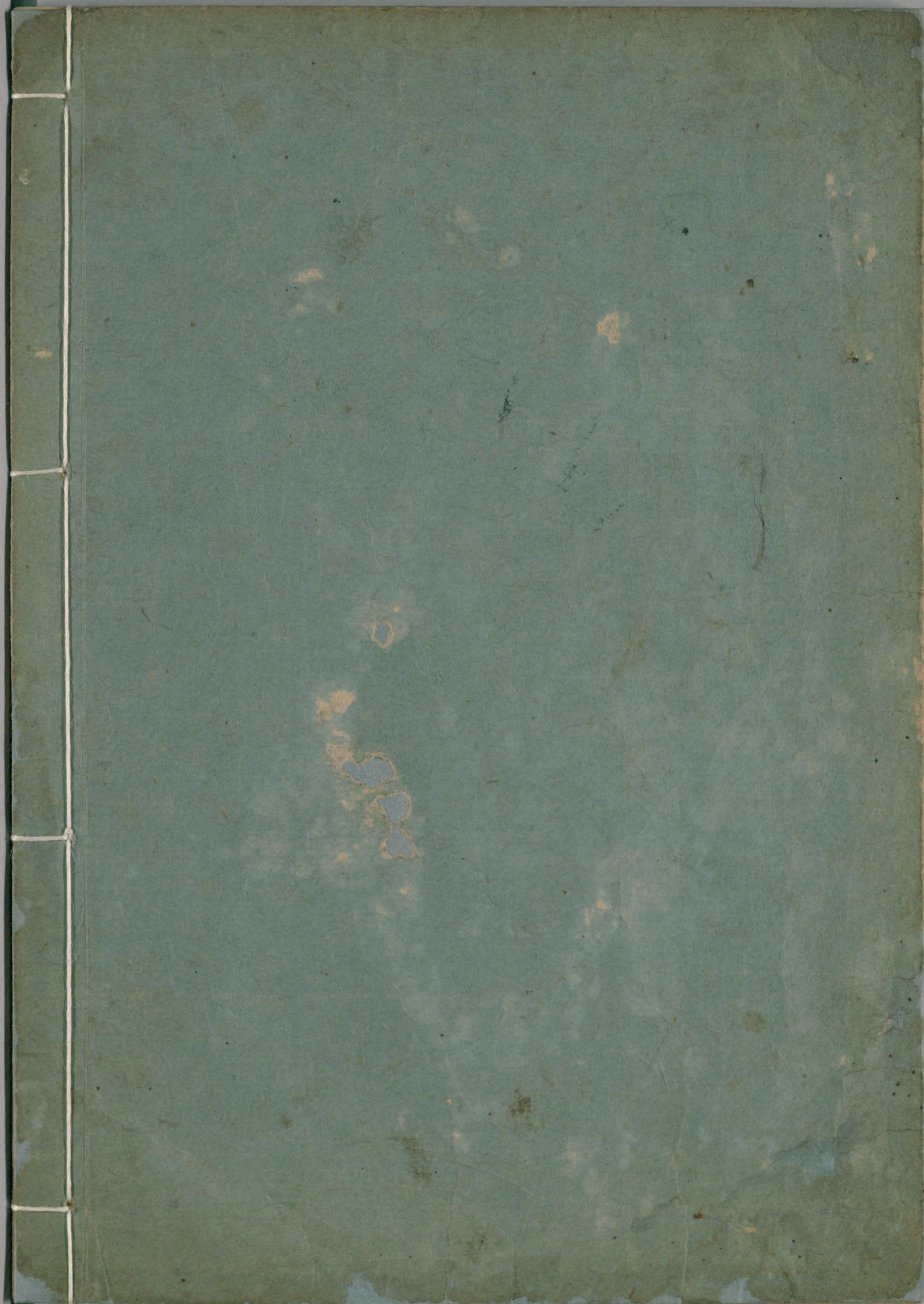
あけ物 栞

文化紀元甲子十一月

方明
五雄 輯

秋風紀行の栞を撰んども
おのれも松平のあけ物
早池のあけ物のあけ物
十日のあけ物のあけ物
十日のあけ物のあけ物

山崎松平



国立国会図書館 タイトル『秋風紀行』 請求記号 863-99

ガラス使用